

聖書:ダニエル書4章29～37節

説教:目を上げて天を見る

はじめに

エレミヤ書には、ネブカドネツアル王がエルサレムを攻めて宮殿を焼き払い財宝を奪ったことや、南王国ユダの最後の王となったゼデキヤの息子たちを虐殺し、ゼデキヤ自身も目を潰されてバビロンに連れて行かれたこと、ネブカドネツアル王に逆ら者は力を用いて徹底的に迫害し、大バビロン帝国の王となったことが書かれています。これを見て私たちは考えます。「こんなひどいことをしたのだから、神のさばきを受けるだろう。」ところが同じエレミヤ書には、神が「わたしのしもべ、バビロンの王ネブカドネツアル」と呼ぶ箇所がいくつかあって、とまどってしまいます。今日の所からそのことを考えていきます。その前にいままでのことを簡単におさらいをします。

1 ダニエル

1) 王の身に起きること

ネブカドネツアル王がその繁栄を極めていたとき、彼はある一つの夢を見るのですが、その夢が王の心をおびえさせることとなります。こんな夢でした。地の中央に天にまで届く木がそびえ立ち、その周りに多くの動物たちが住んでいたのに、あるとき天から聖なる者が降りて来て、この木を切り倒せと命じる。しかし木の根株が残されていく。

王の前に呼ばれたダニエルはしばらく動揺しながらも、夢の解き明かしをします。その木は王自身のこと、やがてその木は切り倒され、あなたはしばらくのあいだ人間の中から追い出されていく。けれども七つの時が過ぎると、あなたはいと高き方が人間の国を支配し、これをみこころにかなう者にお与えになることを知るようになるのだと告げます。

2) 忠告

このように夢の解き明かしをしてからダニエルは27節でこう付け加えます。「それゆえ、王よ、私の勧告を快く受け入れて、正しい行いによってあなたの罪を除き、また貧しい者をあわれんであなたの咎を除いてください。そうすれば、あなたの繁栄は長く続くでしょう。」

2 ネブカドネツアル王

1) 上から下を見おろす

あの夢の出来事から十二ヶ月が経ったとき、夢は現実となっていきます。きっかけは、王が宮殿の屋上を歩きながらこう語ったときでした。30節。「この大バビロンは、王の家とするために、また、私の威光を輝かすために、私が私の権力によって建てたものではないか。」

当時世界の超大国と呼ばれていたバビロン帝国の王が屋上から、町を見おろしてこれは自分の権力によって建てたものであると考えるのは、世の権力者であればだれもがしそうなことです。ところが、王がこのことばを語っている間に、天から声が聞こえてきました。31, 32節。「ネブカドネツアル王よ、あなたに告げる。国はあなたから取り去られた。あなたは人間の中から追い出され、野の獣とともに住み、牛のように草を食べるようになり、こうしてあなたの上を七つの時が過ぎ行き、ついにあなたは、いと高き方が人間の国を支配し、これをみこころにかなう者にお与えになることを知るようになる。」

このあと、王は牛のように草を食べ、地を這いつくばりとても人間とは思えないような汚い姿になってしまいます。理由は明瞭です。ダニエルの忠告を無視したから。つまり、王は罪を除かず、貧しい者をあわれまないうで咎を除かなかったので人間の中から追い出された、という説明になる。

では、いったいいつ貧しい者をあわれまなかったのか。まさに宮殿の屋上を歩いていたときです。高いとことに立って、町を見おろしました。そこで王は何を見ていたのでしょうか。

見るということについて、小さなエピソードを紹介します。礼拝が終わってからある方と雑談をしていたときのことです。いきなり私のネクタイをつかみ、「このネクタイの柄はなにかしら」と言って、まるで犬のリードのように引っ張る。私は、ネクタイには関心がないほうなので、肉眼には見えていても頭の中では見えていない。でもある人は、説教の内容は忘れてもネクタイの色や柄をじっと見て覚えている。このことから、同じものを見ている、人の関心によって見えるものが違うということを知りました。

ネブカドネツアル王の場合も同じです。王の目には町に生活するひとり一人はまったく関心がないので見えていない。その代わり、立派な道路や当時の技術の粋を集めて豪華に飾り立てた建物が見

えてきて、王の心をくすぐります。「私の威光を輝かすために、私の権力によって建てたものではないか。」

屋上から眺めおろしているネブカドネツアルには、貧しい者をあわれむ心はまったくありません。それで夢で告げられたとおりに、彼は人間の中から追い出されてしまいます。あれほどダニエルが忠告していたのに、どうして失敗したのか。そう思うでしょうか。

でも、人間の心というものはそう簡単に変わるものではないことを皆さんも経験していられるでしょう。「きょう聖書から神さまの警告を聞いたので、心を入れ替えよう。」そう決心したのはいいのですが、ではきちんと守れたのか。いつの間にか忘れて、また前と同じようなことを繰り返している自分がある。そんな経験はなかったでしょうか。決してあなたの信仰が弱いからだとか、努力が足りなかったからということではない。注意しなければと心に誓っても、自分で自分の罪を除き咎を除くことができない。世界の超大国を支配する王でさえ、できなかった。そのようなことを教えます。

2) 最も低くなったとき、目を上げて天を見る

この世の中は、一度人生に失敗したり道から外れてどん底まで突き落とされると、人並みにの生き方に戻ることは非常に難しいと感じます。私の経験ですが、大学に入り留年と休学を繰り返していたとき、ある先生から呼ばれて言われたことを忘れることができません。「あなたを大学に置いておくだけで税金の無駄遣いになるから、早く学校を辞めなさい。」自分は世の中の役立たずになったのかと思い、悲しい気持ちになりました。

神はどうなのでしょう。ネブカドネツアルは警告を忘れて高慢になり失敗しました。そのために人間の中から追い出されました。でも、それで終わりではなかった。時が満ちたとき、彼はこう言った。34節。「私ネブカドネツアルは目を上げ天を見た。すると私に理性が戻ってきた。」

かつて天を見上げることなどしたこともなく、金の像を拝むことを拒んだ三人に対して、「どの神が、私の手からお前たちを救い出せるだろうか」と豪語して、神を神とも思わない人でした。その人がいまや天を見上げるようになった。大きな変わりようです。

彼に何が起きたのでしょうか。高いところに立てば何でも見えると思っていました。でも本当は見え

ていなかった。でもこの世で一番低くされ、目を上げて天を見たとき、いままで見えなかったものが見えてきました。自分自身が貧しい者とされて初めて、あの町に暮らす貧しい人達の姿が見えるようになった。

3) 新しい理性が与えられる

「すると私に理性が戻ってきた」と言っている。それは、元の理性が戻って普通の人間の心になった、ということではありません。むしろ、新しい理性が与えられて、新しくされた自分、そう考えたほうがよい。屋上を歩いていたときは、古い理性でした。古い理性では、どんなに頑張っても神を知ることできない。でも新しい理性が与えられ、それで天の神、いと高き方を見るようにされます。

3 神

1) 「わたしのしもべ、バビロンの王ネブカドネツアル」

最後に考えます。神の国である南王国ユダを攻め、財宝を奪い、ユダの人々を虐殺し、非道の数々を行ってきた王。それなのになぜか神は、ネブカドネツアルを「わたしのしもべ、バビロンの王ネブカドネツアル」と呼んだのでしょうか。そんな神の姿を見て、神は不公平であると思うのでしょうか。

2) 王が持っていなかったもの

このことを二つの視点で説明します。一つ目は、人間の側からの視点です。彼は自分の口で言ったように、この世のありとあらゆるものを手にできたと確信していた。しかし彼には一つだけ欠けているものがあつた。本当の神を知らなかった。言い換えれば神を知る事のできる新しい理性を持っていなかった。

3) 王が持っていた唯一のもの

これを今度は神の視点から説明するところになります。彼は神を知らないのですから、神の目には何も持っていないように見えます。しかしただ一つだけ彼が持っていたものがあつた。それは何か。夢を見たときネブカドネツアル王はどうしたかでしょう。夢の話ですからふつうなら無視してもいいのです。ところが彼は無視できない。何か大切なことを夢は語っている。でもその意味がわからなくて非常に動揺してしまう。動揺してしまうほど、霊的な感受性を持っている。王のうちに聖霊が働いてくださっているということです。それで夢を解き明かすためにダニエルが呼ばれ、神の救いのご計画が

明らかにされ、やがて王は天の神を知るようになる。王は、自分のうちから湧き出る思いに正直であった。そのことだけは言えます。

このことについて、イエスがマルコ3章28、29節でこう言われていることを思い出します。「まことに、あなたがたに言います。人の子らは、どんな罪も赦していただけます。また、どれほど神を冒瀆することを言っても、赦していただけます。しかし聖霊を冒瀆する者は、だれも永遠に赦されず、永遠の罪に定められます。」

王はたくさん悪いことをしたかも知れないけれど、聖霊の働きは冒瀆しなかった。正直に聖霊の働きに従った結果、神を知るようになり、罪は赦されます。それで神は「わたしのしもべ」と呼んだのです。

そのネブカドネツアルが告白します。「いと高き方が人間を支配し、これをみこころにかなう者に与え、人間の中の最も低い者をその上に立てる。」バビロン帝国の王が、このことばが真実であることを学び、神を賛美します。

こんな王が赦されていいのか。とまどうでしょうか。でもこれは私たちの励ましになりませんか。「私の罪だけは赦されない」と思う方がいらっしやいます。ネブカドネツアル王でさえ赦されたのならば、いったいどんな罪が赦されないというのでしょうか。「私は聖霊を冒瀆しているかも知れない」と悩む方がいます。安心してください。悩んでいることそのものが聖霊の働きを認めていることになる。決して冒瀆しているではありません。

ネブカドネツアル王が獣のようになって低くなり、神を知ったとき、バビロンの王座に戻ることが許されました。まして、神ご自身が人として最も低くなられ、十字架でいのちをお捨てなられたのです。この方が神の国を御支配してくださるのは当然でしょう。私たちはその方が来られる日を待ち望みます。